

りんどう

褐斑病

発生の動向

- 1 平成 28 年以降、ほぼ毎年発生がみられている（図 1）。
- 2 令和 6 年の巡回調査では、8 月下旬までは発生が確認されなかったが、9 月中旬の発生圃場率は 40.0%（平年 8.6%）と平年より高く、越冬伝染源量は多いと考えられる（図 1、2）。

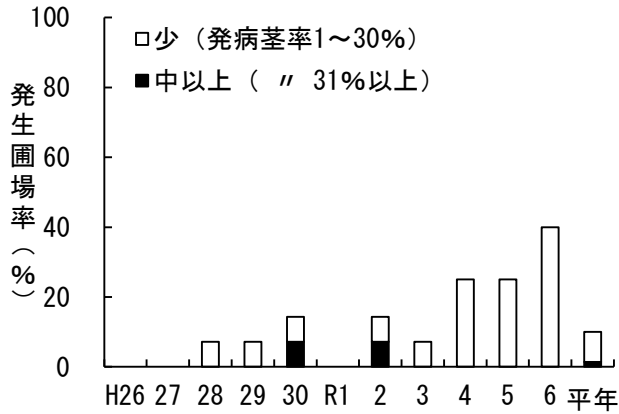


図 1 褐斑病の発生圃場率の年次推移(9月中旬)

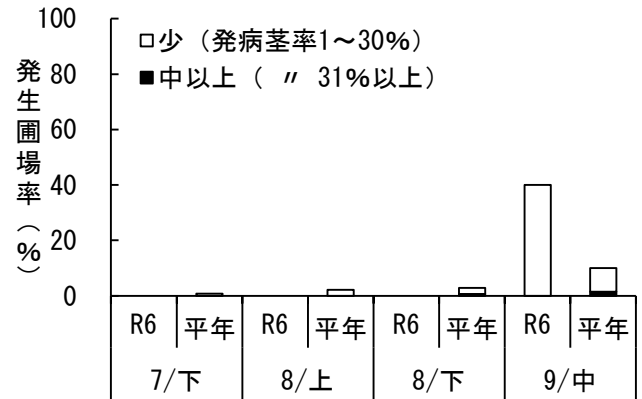


図 2 褐斑病の時期別発生圃場率

防除対策

- 1 前年の発生圃場では翌年も発生する。6 月下旬～7 月中下旬にかけて一次感染するため、この時期に効果の高い薬剤を使用する。
- 2 定植年での発生を防ぐため、定植直後から防除を徹底する。
- 3 薬剤が到達しにくい下位葉や畝の内部、畝の北側等の日当たりの悪い場所で発生が多く見られるため（図 3）、薬剤が株全体に十分かかるように散布する。
- 4 株仕立てが不十分であったり、風通しの悪い圃場では発生が多くなるため、適正な茎数に管理する。
- 5 被害の拡大防止と伝染源除去のため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋める等して処分する。
- 6 秋に発生がみられるため、採花後も圃場内を見回って発生の有無を確認し、被害茎葉は適切に処分する。



図 3 多発事例（8月上旬）※畝の内部での発生が多い

黒斑病

発生 の 動 向

- 1 令和6年の巡回調査では、8月上旬から発生が確認され、8月下旬の発生圃場率は46.2%（令和4、5年の平均27.9%）と調査開始以来最も高かった（図1）。
- 2 近年、春先から高温傾向で経過することによりりんどうの生育が前進傾向である。令和6年は二次感染が始まる着蕾期が早まったため防除のタイミングを逃した事例が多かった。
- 3 令和6年の発生量が多かったことから、越冬伝染源量は多いと考えられる。

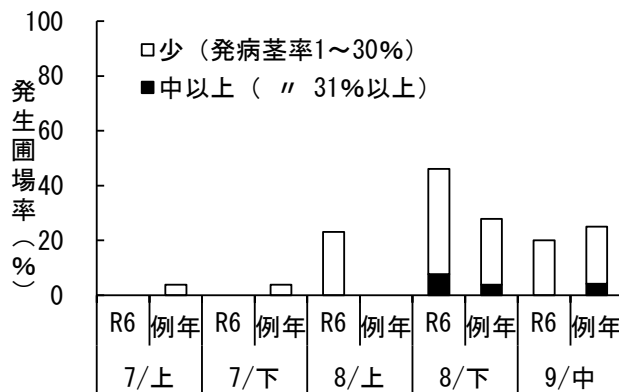


図1 黒斑病の時期別発生圃場率
※例年は令和4、5年の平均値

防 除 対 策

- 1 一次感染は入梅期（6月下旬～7月上旬）、二次感染期は着蕾期であるため、効果の高い薬剤を6月下旬（入梅期）と8月上旬（着蕾期）に散布する。
- 2 梅雨期は、フラワーネット等により生じた葉の傷口から感染、発病する。平均気温20℃以上の連続降雨日に感染するので、この時期の気象に注意しながら降雨前散布に努める。
- 3 草勢の弱い株で発生しやすいので、夏期の草勢を確保するため、降雨後に通路が湛水しないよう排水対策を併せて講じる。